

# 国貞えがく

泉鏡花

青空文庫



柳を植えた……その柳のひとところ一処ひとところ繁つた中に、清水の湧く井戸がある。……大通り四ツ角の郵便局で、東京から組んで寄越した若干金の為替を請取つて、三ツ巻に包んで、ト先ず懷中に及ぶ。

春は過ぎても、初夏はつなつの日の長い、五月中旬なかば、午頃ひるごろの郵便局は閑なもの。受附にもどの口にも他に立集う人は一人もなかった。が、為替は直ぐ手取早くは受取れなかった。

取扱いが如何にも気長で、

「金額は何ほどですか。差出人は誰でありますか。貴下あなたが御当人

なのですか。」

などと間伸まのびのした、しかも際立きわだつて耳につく東京の調子で行る、

……その本人は、受取口から見た処ところ、二十四、五の青年で、羽織はおり

は着ずに、小倉こくらの袴はかまで、久留米くるめらしい緋かすりの袷あわせ、白い襯衣しやつを手首で

留めた、肥った腕の、肩の辺あたりまで捲まくり手で何とも以て忙しそうな、

そのくせ、する事は薩張さつば張は撈はらぬ。態なりに似合あわず悠然ゆうぜんと落着おちつき

済すまして、聊いささか権高けんたかに見える処ところは、土地の士族の子孫らしい。

で、その尻上しりあがりの「ですか」を饒舌しやべつて、時々じろじろと下目しため

に見越みこすのが、田舎漢いなかものだと侮あなどるなど言う態度の、それが明あきらかに

窓まどから見透みえす。郵便局員きか貴下おこころ、御心安やすかれ、受取人たつたの立田織次おりじ

も、同おなじく国の平民である。

きて、局の石段を下りると、広々とした四辻よつ辻に立った。

「さあ、何処どこへ行ゆこう。」

何処へでも勝手に行くが可よし、また何処へも行かないでも可いいい。

このまま、今度の帰省中こころ転ころがつてる従姉いとこの家うちへ帰つても可いいいが、

其そこ処は今しがた出て来たばかり。すぐに取つて返せば、忘れ物で

もしたように思うであろう。……先祖代々の墓はかま詣まいりは昨日きのう済しまま

すし、久しぶりで見たかった公園もその帰りに廻る。約束の会は

明日あしただし、好すきなものは晩ばんに食くべさせる、と従姉いとこが言いつた。差さ当あた

り何の用もない。何年にも幾いく日かにも、こんな暢のん気きな事ことは覚おぼえぬ。

おんぶするならしてくれ、で、些ちと他た愛わいがないほど、のびのびと

した心こころ地ち。

気候は、と言うと、ほかほかが通り越した、これで赫かつと日が当  
 ると、日中は早はやじりじりと来そうな頃が、近山曇りに薄うつすと雲  
 が懸るつて、真綿まわたを日光に干ほすような、ふつくりと軽い暖かさ。午  
 頃るごろの蔭もささぬ柳の葉に、ふわふわと柔やわらかい風が懸る。……その  
 柳の下を、駈おぼけて通る腕車くるまも見えず、人通りはちらほらと、都で  
 言えば臙おぼ夜ろよを浮れ出したような状さまだけれども、この土地ではこ  
 れでも賑にぎやかな町かの分ぶん。城しろ趾あのあたり中なか空ぞらで鳶とびが鳴く、と丁ちど今  
 が春しゅんの鰯いわしを焼く匂においがある。

飯を食くべに行いつても可よし、ちよいと珈琲コオヒイに菓子でも可よし、何処どこか  
 茶店で茶を飲のむでも可よし、別にそれにも及およばぬ。が、袷あわせに羽織あで身  
 は軽かし、駒下駄こまげたは新あたらしし、為替なにかしは取とつたし、ままよ、若なにかし干金がしか貸

しても可い。

「いや、串戯は止して……」

そうだ！ 小北の許へ行かねばならぬ——と思うと、のびのびした手足が、きりきりと緊つて、身体が帽子まで堅くなつた。

なぜか四辺が視められる。

こう、小北と姓を言うのと、学生で、故郷の旧友のようであるが、そうでない。これは平吉……平さんと言うが早解り。織次の亡き親父と同じ黥間の職人である。

此処からはもう近い。この柳の通筋を突当りに、真蒼な山がある。それへ向つて二町ばかり、城の大手を右に見て、左へ折れた、屋並の揃つた町の中ほどに、きちんとして暮しているは

ず。

その男を訪ねるに仔細しさいはないが、訪ねて行くのに、十年越ごしの思  
出がある、……まあ、もう少し秘ひして置こう。

さあ、其処そこへ、となると、早や背後うしろから追立おったてられるように、  
そわそわするのを、なりたけ自分で落着いて、悠々ゆうゆうと歩行あるき出  
したが、取つて三十とという年とし紀の、渠かれの胸の騒ぎよう。さては今  
の時の暢気のんきさは、この浪なみが立とうとする用意に、フイと静まった  
海らしい。



この通は、渠かれが生れた町とは大分間あいだが離れているから、軒のきを並べた両側の家に、別に知己ちかづきの顔も見えぬ。それでも何かにつけて思出す事はあつた。通りの中ほどに、一軒料理屋を兼ねた旅店りよてがある。其処そこへ東京から新任の県知事がお乗込のりこみとあるについで、向つた玄関に段々だんだらの幕を打ち、水桶みずおけに真新しい柄杓ひしゃくを備えて、恭しく盛砂もりずなして、門から新筵あらむしろを敷詰しきまつめてあるのを、向側の軒下に立つて視ながめた事がある。通り懸がりのお百姓は、この前を過ぎるのに、

「ああつ、」といつて腰をのめらして行つた。……御威勢のほどは、後年地方长官会議の節せつに上京なされると、電話第何番と言うのが見得みえの旅館へ宿つて、葱ねぎの噺おくびで、東京の町へ出らるる御身分

とは夢にも思われぬ。

また夢のようだけれども、今見れば麵麩屋パンになつた、丁ちようどその

硝子窓がらすのあるあたりへ、幕を絞つて——暑くなると夜店の中へ、

見世みせものの小屋が掛かつた。猿芝居、大蛇、熊、盲目めくらの墨塗すみぬり——

(この土俵は星の下に暗かつたが)——西洋手品など一ひと廓とくるわに、

草どくだみの花を咲かせた——表通りへ目に立つて、蜘蛛男くもおとこの見世

物があつた事を思出す。

額ひたいの出た、頭の大きい、鼻のしやくんだ、黄色い顔が、その長

さ、大人おとなの二倍、やがて一尺、飯櫃いびつなり形の天窗あたまにチョン鬚まげを載せ

た、身の丈たけというほどのものはない。頤あごから爪先の生えたのが、

金ぴかの上下かみしもを着た処ところは、アイ来た、と手品師が箱の中おから拇

やゆび 指で摘み出しそうな中親仁。これが看板で、小屋の正面に、

ねずみよめいり 鼠の嫁入に担ぎそうな小さな駕籠の中に、くたりとなつて、ふ

んふんと鼻息を荒くするごとに、その出額に蚯蚓のような横筋を

うね 畝らせながら、きよろきよると、込みあ 群集を視めて控える：

： 口上言がその出番に、

「太夫いの、太夫いの。」と呼ぶと、駕籠の中で、しやつきりと

あたま 天窓を掉立て、

「唯今、それへ。」

とひねこびれた声を出し、頤をしゃくつて衣紋を造る。その身

動きに、鼬の香を芬とさせて、ひよこひよここと行く足取が蜘蛛

の巣を渡るようで、大天窓の頸窪に、附木ほどの腰板が、

ちよこなんと見えたのを憶起す。

それが舞台へ懸る途端に、ふわふわと幕を落す。その時木戸に立つた多勢の方を見向いて、

「うふん。」といって、目を剥いて、脳天から振下ったような、  
 紅い舌をぺろりと出したのを見て、織次は悚然として、雲の蒸す  
 月の下を家へ遁帰った事がある。

人間ではあるまい。鳥か、獣か、それともやつぱり土蜘蛛の類  
 かと、訪ねると、……その頃六十ばかりだった織次の祖母さんが、  
 「あれはの、二股坂の庄屋殿じゃ。」といった。

この二股坂と言うのは、山奥で、可怪い伝説が少くない。それ  
 を越すと隣国への近路ながら、人界との境を隔つ、自然のお関

所のように土地の人は思うのである。

この辺あたりからは、峰の松さかえぎに遮られるから、その姿は見えぬ。最もつ  
と乾いぬいの位置で、町端まちはずれの方へ退ると、近山ちかやまの背後うしろに海があり  
そんな雲を隔てて、山の形が歴然ありありと見える。……

汽車が通じてから、はじめて帰ったので、停ステエシヨン車場を出た所の、  
故郷ふるさとは、と一目見ると、石を置いた屋根より、赤く塗った柱よ  
り、先ずその山を見て、暫しばらく時茫然ぼうぜんとしてゐたたずんだのは、つい二、  
三日前の事であつた。

腕車くるまを雇つて、さして行く従姉いとこの町より、真先に、

「あの山は？」

「ふたまたふたまた二股くるまやじゃ。」と車夫が答えた。——織次は、この国に育つ

たが、用のない町まちはずれ端はしまで、小児こどもの時には行ゆかなかつたので、  
 唯名ただに聞きいた、五月晴さつきばれの空も、暗くい、その山。

三

その時は何んの心もなく、件くだんの二股ふたまたまを仰あおいだが、此処ここに来て、  
 昔の小屋の前を通ると、あの、蜘蛛くも大名だいみょうが庄屋しやうやをすると、可怪あや  
 しく胸むねに響ひびくのであつた。

まだ、その蜘蛛くも大名だいみょうの一座いざに、胴たねの太ふとい、脚あしの短みじい、芋虫いもむしが  
 髪かみを結ゆつて、緋ひの腰布こしぬのを捲まいたような侏儒いっすんぼしの婦おんなが、三人さんにんば  
 かりいた。それが、見世みよものの踊おどりを済おさまして、寝ねしなに町まちの湯ゆへ

入る時は、風呂の縁へ両手を掛けて、横に両脚でドボンと浸る。そして湯の中でぶくぶくと泳ぐと聞いた。

そう言えば湯屋はまだある。けれども、以前見覚ええた、両

眼 真黄色な絵具の光る、巨大な蜈蚣が、赤黒い雲の如く渦を

巻いた真中に、俵藤太が、弓矢を挟んで身構えた暖簾が、ただ、

男、女と上へ割つて、柳湯、と白抜きのに懸替つて、門の目

印の柳と共に、枝垂れたようになって、折から森閑と風もない。

人通りも殆ど途絶えた。

が、何処ともなく、柳に暗い、湯屋の硝子戸の奥深く、ドボン

ドボンと、ふと湯の煽つたような響が聞える。……

立淀んだ織次の耳には、それが二股から遠く伝わる、ものの

笏こだまのように聞えた。織次の祖母は、見世物のその侏いっすんぼし儒おんなの婦を  
 教えて、

「あの娘たちはの、蜘蛛庄屋にかどわかされて、そのこしもとになつた  
 いの。」

と昔語りに話して聞かせた所せい為であろう。ああ、薄曇りの空低  
 く、見通しの町は浮上うきあがつたように見る目に浅いが、故郷の山  
 は深い。

また山と言えば思出す、この町の賑にぎやかな店々の赫かつと明るい果はてを、  
たてすじ縦筋くぎに暗く劃くぎつた一条ひとすじの路みちを隔へてて、数すひやく百ともしびの燈火おりめの織目  
ぬけだから抜出したような薄茫うすぼんやり乎として灰色の隈くまが暗夜やみに漾ただよう、まば  
ひとだちらな人立ひとだちを前に控ひえて、大手前おおてまえの土塀どべいの隅すみに、足代板あじろいたの高



座に乗った、さいもん語りのデロレン坊主、但し長い頭髪を額かみのけひたいに振分けふりわけ、ごろごろと錫しやくを鳴らしつつ、塩辛声しおからごえして、

「……姫松ひめまつどのはエ」と、大宅太郎おおやのたろう光国みつくにの恋女房こひにやうが、滝たきや

夜叉姫しやひめの山寨さんさいに捕えられて、小賊しょうぞくどもの手に松葉燻まつばいぶしと

なる処ところ——樹の枝へ釣上げられ、後手うしろでの肱ひじを空そらに、反返そりかえる髪

を倒さかさに落して、ヒイヒイと咽むせんで泣く。やがて夫の光国が来合わ

せて助けるというのが、明晩あくるばんとあつたが、翌あくるばん晩もそのまま

で、次第に姫松の声が渴かれる。

「我が夫つまいのう、光国どの、助けて給たべ。」とばかりで、この武

者修業しゆぎやうの、足の遅おそさ。

三晩目みばんめに、漸やっとこさと山の麓ふもとへ着いたばかり。

織次は、小児心にも朝から気になつて、蚊帳の中でも髻髯

と蚊燻しの煙が来るから、続けてその翌晩も聞きに行つて、汚い

弟子が古浴衣の膝切な奴を、胸の処でだらりとした拳固の矢

蔵、片手をぬい、と出し、人の顚をしゃくうような手つきで、銭

を強請る、爪の黒い掌へ持つていただけの小遣を載せると、目

を睜つたが、黄色い歯でニヤリとして、身体を撫でようとしたの

で、衝と極が悪く退つた頸へ、大粒な雨がポツリと来た。

たちま おおゆうだち 忽ち大驟雨となつたので、蒼くなつて駈出して歸つたが、家

までは七、八町、その、びしよ濡れさ加減思ふべしで。

あと二夜ばかりは、空模様を見て親たちが出さなかつた。

さて晴れば晴れるものかな。磨出した良い月夜に、駒の手

綱を切放きりはなされたように飛出とびだして行つた時は、もうデロレンの高  
 座は、消えたか、と跡もなく、後幕うしろまく一重引いた、あたりの土  
 塀の破目われめへ、白々しろしろと月が射した。  
 茫ぼつとなつて、辻に立つて、前夜の雨を怨めうらしく、空を仰ぐ、と  
 皎々こうこうとして澄渡すみわたつて、銀河一帯、近い山の端はから玉たまの橋を町ま  
 家の屋根へ投げ懸ける。その上へ、真白まっしろな形で、瑠璃色るりの透す  
 のに薄い黄金きんの輪郭した、さげ結びの帯の見える、うしろ向きで、  
 雲のような女の姿が、すつと立つて、するすると月の前を歩行ある  
 て消えた。……織次は、かつ思いかつ歩行あるいて、丁どちようその辻へ来  
 た。

四

湯屋ゆやは郵便局の方へ背後うしろになつた。

辻あたりの、この辺で、月の中空なかぞらに雲を渡る婦おんなまほろしの幻を見たと思う、

屋根の上から、城の大手の森おおてをかけて、一面にどんよりと曇つた

中に、一筋ひとすじ真ま白まっしろな雲の靡なびくのは、やがて銀河になる時節も近

い。……視ながむれば、幼い時のその光景ありさまを、目まのあたり前あたりに見るよう

もあるし、また夢らしくもあれば、前世うさぎが兎であつた時、木賊とくさの

中から、ひよいと覗のぞいた景色のぞかも分らぬ。待こいねがわて、希こいねがわくは兎であり

たい。ふたまたふたまたざかたぬきの狸たぬきは恐れる。

いや、こゝも、他愛たわいのない事を考えるのも、思出おもひだすのも、小北おきた

の許へ行くにつけて、人は知らず、自分で気が咎める己が心を、  
 我とさあらぬ方へ紛らそうとしたのであつた。

さて、この辻から、以前織次の家のあつた、某……町の方へ、  
 おおてすじ まっすぐ  
 大手筋を真直に折れて、一丁ばかり行つた処に、小北の家が  
 ある。

両側に軒の並んだ町ながら、この小北の向側だけ、一軒づ  
 もりポカリと抜けた、一町内の用心水の水溜で、石畳みは  
 強勢でも、緑晶色の大溝になっている。

向うの溝から鱒によりり、こちらの溝から鱒によりり、と饒舌  
 るのは、けだしこの水溜からはじまつた事であろう、と夏の  
 夜店へ行歸りに、織次は独りでそう考えたもので。

おなじはやしやべ  
同一早饒舌りの中に、茶釜雨合羽ちやがまあまがつぱと言うのがある。トあた

かもこの溝の左角ひだりかどが、合羽屋かっぱや、は面白い。……まだこの時も、  
渋紙しぶかみの暖簾のれんが懸かかつた。

折から人通りが二、三人——中の一人が、彼の前を行過ぎゆきすて、

フト見返つて、またひよいひよいと尻軽あるきだに歩行出した時、織次は

帽子ひさしの底を下げたが、瞳ひとみを屹きつと、溝の前から、件くだんの小北の店を透

かした。

此処ここにまた立留たちどまつて、少時しばらく猶予ためらつていたのである。

木格子きごうしの中に硝子戸がらすどを入れた店の、仕事の道具みえすは見透みえすいたが、

弟子まえたれの前垂まえだれも見えず、主人あるじの平吉はんてんが半纏はんてんも見えぬ。

羽織そでの袖口そでぐち両方あがが、胸あがにぐいと上あがるように両腕あがを組むと、身か

体に勢らだいきおを入れて、つかつかと足を運んだ。

軒のきから直ぐに土間どまへ入つて、横向きに店の戸を開けながら、

「御免なさいよ。」

「はいはい。」

と軽い返事で、身軽にちよこちよこ茶の間から出た婦おんなは、下

膨もぶくれの色白で、真中から鬢びんを分けた濃い毛の束たばね髪がみ、些ちと煤すすび

たが、人形だちの古風な顔。満まんざら更きりようの容きりよう色きりようではないが、紺つの筒

袖つそでの上被衣うわつぱりを、浅葱あさぎの紐むなだかで胸むなだか高むなだかにちよつと留とめた甲斐かい甲斐がい

しい女房むすめぶり。些ちと気きになるのは、この家うちあたりの暮くらしむ向むきでは、

これがつい通りの風俗たれで、誰たれも怪あやしみはしないけれども、畳たたみの上

を尻端折しりばしより、前まえだれ垂たれで膝ひざを隠かくしたばかりで、湯具ゆのぐをそのままの足

を、茶の間と店の敷居で留めて、立ち身のなりで口くちばや早なもの  
 言いよう。

「何処どこからおいで遊ばしたえ、何んの御用で。」

と一いつこう向気むかひのない、空くうで覚えたような口こうじょう上ことば。言つきは慇いんぎ  
 懃んながら、取附とりつき端はのない会釈をする。

「私わたしだ、立田たつただよ、しばらく。」

もう忘れたか、覚えがあらう、と顔を向ける、と黒目がちでも  
 勢せいのない、塗ったような瞳を流して、凝じっと見たが、

「あれ。」と言いさま、ぐつたりと膝を支ついた。胸を衝つと反らし  
 ながら、驚いた風をして、

「どうして貴下あなた。」



とひよいと立つと、端折はしよった太ふくらはぎ脛つづの包つつましい見み得えものう、  
 ト身を返して、背後うしろを見せて、つかつかと摺すり足あしして、奥かたの方かたへ  
 駈か込みながら、

「もしえ！　もしえ！　ちよつと……立田様の織おりさんが。」

「何、立田さんの。」

「織さんですがね。」

「や、それは。」

という平吉の声が台所で。がたがた、土間を踏ふむ下げ駄たの音。

五

「さあ、お上り遊ばして、まあ、どうして貴下。」

とまた店口へ取つて返して、女房は立迎える。

「じゃ、御免なさい。」

「どうぞこちらへ。」と、大きな声を出して、満面の笑顔を見せた平吉は、茶の室を越した見通しの奥へ、台所から駈込んで、幅の広い前垂で、濡れた手をぐいと拭きつつ、

「ずっと、ずっとずっとこちらへ。」ともう真中へ座蒲団を持出して、床の間の方へ直しながら、一ツくるりと立身で廻る。

「構つちや可厭だよ。」と衝と茶の間を抜ける時、襖二間の上を渡つて、二階の階子段が緩く架る、拭込んだ大戸棚の前で、入ちがいになつて、女房は店の方へ、ばたばたと後退りに退つ

た。

その茶の室まの長火鉢はきを挟はさんで、差さむかいに年寄としよりが二人いた。  
 ああ、まだ達者だと見える。火鉢の向むかうに踞つくばつて、その法然ほうねん天あ  
 窓まが、火の氣の少い灰の上に冷たそううえで、鉄瓶てつびんより低い処ところに  
 しなびたのは、もう七十うえの上うえになろう。この女房の母親おふくろで、年  
 紀しの相違ちがひが五十うえの上うえ、余り間まがあり過ぎるようだけれども、これ  
 は女房が大勢おほしの娘むすめの中に一番末すえつこ子こである所せい為いで、それ、黒のけ  
 んちゆうの羽織はおりを着きて、小さな鬘まげに鼈べつこう甲かの耳みみこじりをちよこん  
 と極きめて、手首てしずに輪数珠わじゆずを掛けた五十格好ごうごうの婆ばばあが背後うしろむき向むに坐まつ  
 たのが、その総そうりよう領りやうの娘むすめである。

不沙汰ぶさた見舞みまひに来ていたろう。この婆ばばあは、よそへ嫁かたづ附づいて今は産

んだ<sup>せがれ</sup>倅にかかつているはず。倅というのも、煙管<sup>きせる</sup>、簪<sup>かんざし</sup>、同じ事を業<sup>ぎよう</sup>とする。

が、この<sup>ばばあむすめ</sup>婆娘は虫が好かぬ。何<sup>なぜ</sup>為か、その上、幼い記憶に

怨恨<sup>うらみ</sup>があるような心<sup>こころもち</sup>持<sup>もち</sup>が、一目見ると直ぐにむらむらと起つ

たから——この時黄色い、でつぶりした眉<sup>まゆ</sup>のない顔を上げて、じ

ろりと額<sup>ひたい</sup>で見上げたのを、織次<sup>きつ</sup>は屹<sup>ただひとめ</sup>と唯<sup>ただひとめ</sup>一目。で、知らぬ顔し

て奥へ通つた。

「南無阿弥陀仏<sup>なあまいだぶ</sup>。」

と折<sup>うな</sup>から唸<sup>としより</sup>るように老人<sup>ととな</sup>が唱<sup>とな</sup>えると、婆娘<sup>ばばあむすめ</sup>は押冠<sup>おつかぶ</sup>せて、

「南無阿弥陀仏<sup>なあまいだんぶ</sup>。」と生<sup>なまわか</sup>若<sup>なまわか</sup>い声を出す。

「さて、どうも、お珍しいとも、何んとも早や。」と、平吉は坐

りも遣<sup>や</sup>らず、中腰でそわそわ。

「お忙しいかね。」と織次は構わず、更紗<sup>さらぎ</sup>の座蒲団を引寄せた。

「ははは、勝手に道楽で忙しいんでしてな、つい暇<sup>ひま</sup>でもございませるしね、怠<sup>なま</sup>け仕事に板前<sup>いたまえ</sup>で庖<sup>ほう</sup>丁<sup>ちよう</sup>の腕前を見せていた所で

してねえ。ええ、織さん、この二、三日は浜で鯛<sup>いわし</sup>がとれますよ。」

と縁<sup>えん</sup>へはみ出るくらい端近<sup>はしぢか</sup>に坐ると一緒に、其処<sup>そこ</sup>にあつた塵<sup>ちり</sup>を

拾<sup>ひ</sup>つて、ト首<sup>ひね</sup>を捻<sup>ね</sup>つて、土間に棄てた、その手をぐいと掴<sup>つか</sup>んで、

指を揉<sup>も</sup>み、

「何時<sup>いつ</sup>、当地<sup>こつち</sup>へ。」

「二、三日前さ。」

「雑<sup>ざつ</sup>と十四、五年になりますな。」

「早いものだね。」

「早いにも、織さん、私わつしなんざもう御覧の通り爺じじいになりましたよ。これじゃ途中で擦すれちが違がったぐらいでは、ちよつとお分りになりません。すまい。」

「否、些いやちつとも変らないね、相あいかわらず意気いきな人さ。」

「これはしたり！」

と天井拔けに、突つ出きす腕かで額ひたいを叩たたいて、

「はつ、恐おそれい入いったね。東京仕込じこみのお世辞せじは強きつい。人ひと、可い加い減げん

に願ねがいますぜ。」

と前まえ垂だれを横よこに刎はねて、肱ひじを突張つり、ぴたりと膝ひざに手てを支たいて

向むき直なおる。

「何、串戯じょうだんなものか。」と言う時、織次は巻まきた蓆たばこを火鉢に  
 さして俯向うつむいて莞爾にっこりした。面色おももちは凜りんとしながら優やさしかった。  
 「粗末ひとなお茶でございます、直ぐに、あの、入いれかえますけれど、  
 お一ツ。」

と女房が、茶の室まから、半身を摺すらして出た。

「これえ、私わつしが事を意気な男だとお言いなさるぜ、御馳走ごちそうをしな  
 けりや不可いかんね。」

「あれ、もし、お膝に。」と、うっかり平吉の言う事も聞落ききおとし  
 たらしかつたのが、織次が膝に落ちた吸殻すいがらの灰を弾はじいて、はつ  
 としたように瞼まぶたを染めた。

六

「さて、どうも更あらたまりましては、何んとも申もうしわけ訳のない御無沙汰ごぶさたで。否いえ、もう、そりや実に、鳥からすの鳴かぬ日はあつても、お噂うわさをしない日はありませんが、なあ、これえ。」

「ええ。」と言つた女房の顔色の寂さびしいので、鳥ばかり鳴くのが分る。が、別に織次は噂をされようとも思わなかつた。

平吉は畳たたみ掛かけ、

「牛は牛づれとか言うんでえしよう。手前が何しますにつけて、これもまた、学校に縁えん遠どい方だつたものでえすから、暑さ寒さの御見舞だけと申すのが、書けないものには、飛んだどうも、実じ



ついでに印をお捺しますより、事も大層になります処から、何とも申もうしわ訳わけがございせん。

何しろ、まあ、御ご緩ゆるりなすつて、いずれ今晚は手前どもへ御一泊下さいましょうで。」

と膝をすつと手先で撫なでて、取澄とりすました風をしたのは、それに極きまつた、という体ていを、仕方で見せたものである。

「串じょうだん 戯ぢやない。」と余りその見透みえすいた世辞よこしまの苦にが々にがしさに、織次は我知らず打棄うちちやるように言った。些ちとその言ことばが激げきしかったか、

「え。」と、聞直ききなすようにしたが、忽たちまち唇くちびるの薄うす笑わらい。

「ははあ、御お同つれ伴ばいの奥おくさんがお待兼まちかねで。」

「串戯じやない。」

と今度は穩おだやかに微笑ほほえんで、

「そんなものがあるものかね。」

「そんなものとは？」

「貴あなた下、まだ奥おく様はお持ちなさりませんの。」

と女房、胸を前へ、手を畳にす。

織次は巻まき苘たばこを、ぐいと、さし捨てて、

「持つもんですか。」

「織さん。」

と平吉は薄かりく刈そろ揃そろえた頭を掉ふつて、目を据すえた。

「まだ、貴あなた下、そんな事を言っていますね。持つものか！ なん

て貴下あなた、一生持たないでどうなさる。……また、こりやお亡くな  
 んなすつた父おとっさん様に代かわつて、一説ひとせつ法ほうせにやならん。例ばんしの晩ばん  
 酌やくの時ときと言いうとはじまつて、貴下あなたが殊ことの外ほか弱じやくらせられたね。あ  
 れを一つ遣やりやしよう。」

と片手で小膝をポンと敲たたき、

「飲みながらが可いい、召飯めしあがりながら聴聞ちようもんをなさい。これえ、  
 何を、お銚子ちようしを早く。」

「唯はい、もう爛つつけてござりえす。」と女房が腰を浮かす、その裾すそ  
 端折しよりで。

織次は、酔いつた勢いきおいで、とも思う事があつたので、黙もくつていた。

「ぬたをの……今わつし、私わつしが搦鉢すりばちに拵こしらえて置おいた、あれを、鉢はちに入い

れて、小皿を二つ、可いか、手て綺麗ぎれいに装よわないと食くえぬ奴やつさね。  
 ……もう不ふ断だん、本場ほんまで旨うまいものを食ありつけがてるから、田舎料理いんさな  
 んぞお口くちには合あわん、何なににも入いらない、ああ、入いらないとも。」  
 と独ひとりで極きめて、もじつく女房にようばうを台所だいじょへ追お立たてながら、  
 「織おさん、鰯いわしのぬただ、こりや御存ごぞんじの通とり、他国たこくにはない味あじで  
 す。これえ、早はやくしなよ。」

ああ、しばらく。座まにその鰯いわしの臭においがない内うち、言いわねばならぬ  
 事ことがある……

「あの、平へいさん。」

と織お次つぎは若わ々わしいもの言いひした。

「此家こちらに何なにだね、僕ぼくン許とこのを買かってらつた、錦にしき絵えがあつたつ

けね。」

「へい、錦絵。」と、さも年とし久ひさしい昔を見るように、瞳ひとみを凝じつと上へあげる。

「内うちで困こつて、……今でも貧乏おんなじは同一おんなじだが。」

と織次きつは屹きつと腕うでを拱くんだ。

「私が学校いで要いる教科書いが買いえなかつたので、親仁おやしが思切おもいきつて、阿母おふくろの記念かたみの錦絵いを、古本屋いに売いつたのを、平いさんが買い戻もどして、蔵しまつといてくれた。その絵いの事ことだよ。」

時雨しぐれの雲いの暗くい晩ばん、寂さびしい水菜みずなで夕餉ゆうげが済すむ、と箸はしも下したに置おかぬ前さきから、織次きつはどうしても持もたねばならぬ、と言いつて強請ねだつた、新撰物理書しんせんぶつりしよという四冊よっぺんもの黒表紙くろひょうし。これがなければ学校い

へ通かよわれぬと言うのではない。科目は教師が黒板ポオルドに書いて教授するのを、筆記帳へ書取かきとつて、事は足りたのであるが、皆みんなが持つてるから欲しくてならぬ。定価がその時金八十銭きんと、覚えている。

七

親父はその晩、一合の酒も飲まないで、燈火ともしびの赤黒い、火屋ほやの亀裂ひびに紙を貼った、笠の煤すすけた洋燈ランプの下もとに、膳ぜんを引いた跡を、直ぐ長火鉢の向うの細工場さいくばに立ちもせず、袖そでに継つぎのあたった、黒のごろの半襟はんえりの破れた、千草色ちぐさいろの半纏はんてんの片手を懐ふところに、膝ひざを立てて、それへ頬杖ほおづえついて、面長おもながな思案顔を重そうに支ささえて

だんまり  
黙然。

ちよつと取<sup>とり</sup>着<sup>つき</sup>端<sup>は</sup>がないから、

「だって、欲<sup>ほし</sup>いんだもの。」と言<sup>い</sup>い棄<sup>す</sup>てに、ちよこちよここと板<sup>いた</sup>の間<sup>ま</sup>を伝<sup>た</sup>つて、だだッ広い、寒<sup>さ</sup>い台所<sup>だいしよ</sup>へ行<sup>ゆ</sup>く、と向<sup>む</sup>うの隅<sup>すみ</sup>に、霜<sup>しも</sup>が見<sup>み</sup>える……祖母<sup>おばあ</sup>さんが頭<sup>ずきん</sup>巾<sup>きん</sup>もなしの真<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>な小<sup>こ</sup>さなおばこで、皿<sup>しづ</sup>鉢<sup>はち</sup>を、がちがちと冷<sup>つめ</sup>たい音<sup>ね</sup>で洗<sup>せん</sup>つてござる。

「買<sup>か</sup>つとくれよ、よう。」

と聞<sup>き</sup>分け<sup>きわ</sup>もなく織<sup>た</sup>次<sup>もと</sup>がその袂<sup>たもと</sup>にぶら下<sup>さ</sup>つた。流<sup>なが</sup>は高<sup>たか</sup>い。走<sup>は</sup>りもとの破<sup>やぶ</sup>れた芥<sup>ごみ</sup>箱<sup>ばこ</sup>の上下<sup>うへした</sup>を、ちよろちよろと鼠<sup>ねず</sup>が走<sup>は</sup>つて、豆<sup>まめ</sup>洋<sup>らん</sup>燈<sup>とう</sup>が蜘蛛<sup>くも</sup>の巢<sup>ねす</sup>の中<sup>ちゆう</sup>に茫<sup>ぼう</sup>とある……

「よう、買<sup>か</sup>つとくれよ、お弁<sup>うめ</sup>当<sup>ぼし</sup>は梅<sup>うめ</sup>干<sup>ぼし</sup>で可<sup>い</sup>いからさ。」

としより  
祖母は、顔を見て、しばらく黙つて、

「おお、どうかして進ぜよう。」

と洗いさした茶碗をそのまま、前垂まえだれで手を拭き拭き、氷のよ

うな板の間を、店の畳へ引返ひきかえして、火鉢の前へ、力なげに膝を

ついて、背後うしろ向きに、まだ俯向うつむいたなりの親父を見向いて、

「の、そうさつしやいよ。」

「なるほど。」

「他の事ではない、あの子も喜ぼう。」

「それでは、母親おつかさん、御苦労でございます。」

「何んの、お前。」

と納戸なんどへ入つて、戸棚から持出した風呂敷ふろしきづつみ包が、その錦にしき絵え



で、くにさだ国貞の画が二百余枚、むしほし虫干の時、ひなまつり雛祭、ながよ秋の長夜の  
 おりおりごとに、なしみ馴染のあねさま姉様三千で、したや下谷の伊達者、ふかがわ深川の  
あだもの婀娜者がたんと沢山いる。

おぼあ祖母さんは下に置いて、

「一度見さつしやるか。」と親父に言った。

「いや、見ますまい。」

と顔をそむ背向ける。

としより祖母はほど解き掛けたか結むすびめ目を、そのままゆわ結えて、ちよいとえり襟を引

合わせた。細いはんえり半襟のはんてん半纏の袖の下にそで抱かかえて、店のはずれを

板の間から、土間へ下りようとして、ところろ暗い処で、

「かわい可哀やの、あねさま姉様たち。私がわし許もとを離れてもの、くもおとこ蜘蛛男に買わ

れさつしやるな、ふたまたぎか 二股坂へ行くまいぞ。」

と小さな声して言聞かせた。いいいき 織次は小児心にも、その絵を売

つて金子に代えるのである、と思つた。……顔かおなじみ 馴染の濃い紅、くれない

うすむらさき 薄紫、雪の膚の姉様たちが、この暗夜を、すつと門かど を出る、

……と偶ふと寂しくなつた。が、紅、べに 白粉おしろい が何んのその、で、新

撰物理書の黒表紙が、四冊並んで、目の前で、ひよい、と躍おどつた。

「待つてごさい、織おりや。」

ごろごろと静かな枢戸くるるどの音。

台所を、どどんがたがた、鼠あれのが荒野と駈かけまわ廻る。

と祖母としよりが軒先から引返して、番傘ばんがさを持って出直でなおす時、

「あのを、台所の燈あかりを消しといてくらつしやいよ、の。」

で、ガタリと門の戸がしまつた。

コトコトと下駄の音して、何処まで行くぞ、時雨の脚が颯と通る。あわれ、祖母に導かれて、振袖が、詰袖が、褌を取つたの、裳を引いたの、鼈甲の櫛の照々する、銀の簪の揺々するの、真白な脛も露わに、友染の花の幻めいて、雨具もなしに、びしゃびしゃと、跣足で田舎の、山近な町の暗夜を辿る風情が、雨戸の破目を朦朧として透いて見えた。

それも科学の権威である。物理書というのを力に、幼い眼を眩まして、その美しい姉様たちを、ぼつたて、ぼつたて、叩き出した、黒表紙のその状を、後に思えば鬼であろう。

台所の灯は、遙に奥山家の孤家の如くに点れている。

トその壁の上を窓から覗のぞいて、風にも雨にも、ばさばさと髪を揺ゆつて、団扇うちわの骨ばかりな顔を出す……隣の空地の棕櫚しゆろの樹が、その夜は妙しんに寂しんとして氣勢けはいも聞えぬ。

鼠ひっそりも寂莫ひっそりと音を潜ひそめた。……

八

台所すだれと、この上あがりがまちがまち 框かまちとを隔へての板戸いたどに、地方いなかの習慣ならいで、蘆あしの簾すだれの掛かつたのが、破やぶれる、断きれる、その上、手の届とどかぬ何年かの煤すすがたまって、相馬内裏そうまだいりの古御所ふるごしよめく。

その蔭かげに、遠あかりい灯あかりのちらりとするのを背後うしろにして、お納戸なんどいろ色

の薄い衣きぬで、ひたと板戸に身を寄せて、今出て行つた祖母としよりの背うしろ後影かげを、凝じつと見送る状さまにイんだ婦おんながある。

一目見て、幼い織次はこの現世うつしよにない姿を見ながら、驚きもせず、しかし、とぼんとして小さく立つた。

その小児こどもに振向ふりむけた、真白な気高い顔が、雪のように、颯さつと消える、とキリキリキリ——と台所を六角ろっかくに井桁いげたで仕切つた、内うち井戸ちいどの轆轤ろくろが鳴つた。が、すぐに、かたりと小皿こひらが響いた。

ながしところながしところ流ながの処ところに、浅葱あさぎの手絡てがらが、時ならず、雲から射す、濃い月影つきかげのようくろかみにちらちらして、黒髪くろかみのおくれ毛けがはらはらとかかる、鼻筋はなすねのすつと通とおつた横顔よこがおが仄見ほのみえて、白しろい拭布ふきんがひらりと動いた。

「織坊おりぼう。」

と父が呼んだ。

「あい。」

ばたばたと駈出して、その時まで同じ処ところに、画えに描かいたように静じつとして動うごかなかつた草色くさいろの半纏はんてんに搦から附みつく。

「ああ、阿母おつかのような返事をする。肖そつ然くりだ、今の声こゑが。」

と膝へ抱く。胸むねに附く着つき、

「台所だいしよに母おつか様さんが。」

「ええ！」と父親が膝を立てた。

「祖母おばあさんの手伝てづいして。」

親父は、そのまま緊しつ乎かと抱かいて、

「織坊おぢやう、本ほんを買かつて、何なにを習まなう。」

「ああ、物理書を皆読むとね、母様のいる処が分るって、先生がそう言ったよ。だから、早く欲しかったの、台所にいるんだもの、もう買わなくとも可い。……おいでよ、父上。」

と手を引張ると、猶予いながら、とぼとぼと畳に空足を踏んで、板の間へ出た。

その躡音より、鼠の駈ける音が激しく、棕櫚の骨がばさりと覗いて、其処に、手絡の影もない。

織次はわつと泣出した。

父は立ちながら背を擦って、わなわな震えた。

雨の音が颯と高い。

「おお、冷え、本降、本降。」

と高調子たかぢようしで門を入つたのが、此処ここに差向さしむかつたこの、平吉へいの  
 傘からかさをがさりと掛けて、提灯ちようちんをふつと消す、と蠟燭ろうそくの匂においが

立つて、家うちじゆう中かおり仏壇の薰かおりがした。

「呀や！ 世話場せわばだね、どうなすつた、父とつさん。お祖母としよりは、何処どこへ

」

で、父いちぶしじゆうが一伍一什あつたらを話すと――

「立替たてかえましょう、可あつたら惜あつたらものを。七貫や八貫で手離すには当り

やせん。本屋いんぐらじや幾千いくちに買うか知れないけれど、差当さしあたり、その

物理書ぶつりしよというのを求めなざる、ね、それだけ此処ここにあれば可いい訳わけ

だ、と先ず言つた訳わけだ。先方さきの買直かいねがぎりぎりの処ところなら買かいもど戻す



とする。……高く買っていたら破談にするだ、ね。何しろ、ここは一ツ、私に立替えさしてお置きなさい。……そらそら、はじめたはじめた、お株が出たぜえ。こんな事に済まぬも義理もあつたものかね、ええ、君。」

と太く書生ひとぶつて、

「だから、気が済まないなら、預け給え。僕に、ね、僕は構わん。構わないけれど、唯立替えたださして気が済まない、と言うんなら、その金子かねの出来るまで、僕が預かつて置けば可ようがしよう。さ、それで極きまつた。……一ツ莞爾にっこりとしてくれ給え。君、しかし何んだね、これにつけても、小兒こどもに学問ことなんぞさせねえが可いじやないかね。くだらない、もうこれ織おり公こうも十一、吹ふいごばたばたは勤

まるだ。二銭三銭の足たしにはなる。ソレ直ぐに鹿尾菜ひじきの代だいが浮いて出ようというものさ。……実ところの処、僕が小指レコの姉なんぞも、此家ここへ一人二度目妻にどめのを世話しようといつてますがね、お互にこの職人こどもが小児こどもに本を買つて遣やる苦勞をするようじゃ、未すえを見込んで嫁入きてがないツさ。ね、祖母とよりが、孫と君の世話をして、この寒さむぞら空に水仕事だ。

因果な婆さんやないかい、と姉がいつでも言ってます。」……  
とその時言つた。

——その姉と言うのが、次室つぎのまの長火鉢ところの処ところに来ている。——

そこへ、祖母としよりが帰つて来たが、何んにも言わず、平吉に挨拶あいさつもせぬ先に、

「さあ」と言つて、本を出す。

織次は飛んで獅子の座へ直なおつた勢いきおい。上から新撰とびつに飛付く、と突つんのめつたようになつて見た。黒表紙には綾あやがあつて、艶つやがあつて、真黒な胡蝶ちようちようの天鵝絨びろうどの羽のように美しく……一枚開くと、きらりと字が光つて、細流せせらぎのように動いて、何がなしに、言いようのない強い薫かおりが芬ぶんとして、目と口に浸しみこ込んで、中に描かいた器械がらすの凶などは、ずツしり鉄くろがねの楯たてのように洋燈ランプの前に躡あれ出いでて、絵の硝子がらすが燐ぼつと光つた。

さて、祖母としよりの話では、古本屋は、あの錦絵にしきえを五十銭から直ねを  
付け出して、しまいに七十五銭よりは出せぬと言う。きなかもそ  
の上はつかぬと断ことわる。欲ほしい物理書は八十銭。何でも直ぐに買って  
帰つて、孫が喜ぶ顔を見たさに、思案に余つて、店端みせさきに腰を掛  
けて、時雨しぐれに白髪しろがを濡らしていると、其処そこの亭主が、それでは婆  
さんこうしなよ。此処ここにそれ、はじめの一冊だけ、ちよつと表紙  
に竹篋たけべらの折返しの跡をつけた、古本の出物でものがある。定価から五  
銭引いて、丁ちようどに罫つばを合わせて置く。で、孫に持つて行つて遣や  
が可いい、と捌さばきを付けた。国貞くにさだの画がが雑ざつと二百枚、辛かろうじてこ  
の四冊の、しかも古本と代つたのである。

平吉はいきり出した。何んにも言うなで、一円出した。

「織坊、母様の記念だ。お祖母さんと一緒に行つて、今度

はお前が、背負つて来い。」

「あい。」

とその四冊を持って立つと、

「路が悪い、途中で落して汚すとならぬ、一冊だけ持って来さつ

しやい、また抱いて寝るのじやの。」

と祖母も莞爾して、嫁の記念を取返す、二度目の外出はいそ

いそするのに、手を曳かれて、キッチンと小口を揃えて置いた、あ

と三冊の兄弟を、父の膝許に残しながら、出しなに、台所を竊

と覗くと、灯は棕櫚の葉風に自から消えたと覚しく……真の暗が

りに、もう何んにも見えなかつた。

雨は小止こやみで。

織次は夜道をただ、夢中で本の香かを嗅かいで歩ある行るいた。

古本屋は、今日この平吉の家うちに来る時通つつた、確か、あの湯屋ゆや

から四、五軒手前てまへにあつたと思う。四よつ辻つじへ行く時とき分に、祖母とじよりが

破やぶ傘れがさをすぼめると、蒼あおく光あかりつて、蓋ふたを払はらつたように月つきが出る。

山の形は骨ばかり白く澄すんで、兎うさぎのような雲うみが走る。

織次は偶ふと幻まぼろしに見た、夜店の頃の銀河の上うへの婦おんなを思おもつて、先刻さつき

とぼとぼと地獄おいへ追遣いやられた大勢あねさんの姉様あねさんは、まさに救すくわれてその

通り天あまにのぼる、と心こころが勇ゆうむ。

一足先へ駈かけ出して、見覚みえた、古本屋の戸かどへ附く着つついたが、店みせも

大戸おおども閉とつていた。寒ふさは寒ふし、雨あめは降ふつたり、町まちは寂しんとして何なに

処にも灯の影は見えぬ。

「もう寝たかの。」

と祖母がせかせかござって、

「御許さい、御許さい。」

と遠慮らしく店頭みせさきの戸たをたたく。

天窗あまどの上でガツタリ音して、

「何んじや。」

と言う太い声。箱のような仕切戸しきりどから、眉の迫った、頬の膨れ

た、への字の口して、小鼻の筋から頤おとがへかけて、べたりと薄髯うすひげ

の生えた、四角な顔を出したのは古本屋の亭主で。……この顔と、

その時の口惜くやしさを、織次は如何いかにしても忘れられぬ。

絵はもう人に売った、と言った。

見知越みしりごしの仁じんならば、知らせて欲ほしい、何処そこへ行つて頼たのみたい、

と祖母としよりが言いうと、ちよいちよい見懸みける男おとこだが、この土地のもの

ではねえの。越後えちごへ行く飛脚ゆだによつて、脚あしが疾はやい。今頃いまはもう

ふたまたふたまた一いっ股こを半分越こしたろう、と小窓こまどに頬杖ほおづえを支たいて嘲笑あざわらった。

縁えんの早はやい、売うれ口くちの美うい別嬪べっぴんの画えであつた。主ぬしが帰かえつて間まも

ない、店の燈あかり許もとへ、あの縮緬ちりめん着物ぎものを散ちらかして、扱しごきも、

襟えりも引ひきさらげて見みている処ところへ、三度笠さんどがさを横よこつちよで、てしま莫ご

塵ご、脚絆きこはん穿き、草鞋わらじでさつさつと遣やつて来た、足の高い大男おとこが通

りすがりに、じろりと見て、いきなり価ねをつけて、ずばりと買かつ

て、濡ぬらしちやならぬと腰こしづけに、きりりと、上帯うわおびを結むすび添そえ



て、雨の中をすたすたと行方知れずよ。……

「分つたか、お婆々。」と言つた。

## 十

断念めかねて、祖母が何か二ツ三ツ口を利くと、挙句の果が、

「老耄婆め、帰れ。」

と言つて、ゴトンと閉めた。

祖母が、ト目を擦つた。帰途。本を持った織次の手は、氷の

ように冷めたかつた。そこで、小さな懐中へ小口を半分差込んで、  
 圧えるように頤をつけて、  
 悄然とすると、辻の浪花節

が語つた……

「姫松殿がエ。」

が暗から聞える。——織次は、飛脚に買去られたと言う大勢の姉様が、ぶらぶらと甘干の柿のように、樹の枝に吊下げられて、上げつ下ろしつ、二股坂で苛まれるのを、目のあたりに見るように思つた。

とやっぱり芬とする懐中の物理書が、その途端に、松葉の燻る臭気がし出した。

固より口実、狐が化けた飛脚でのうて、今時町を通るものか。足許を見て買倒した、十倍百倍の儲が惜さに、貉が勝手なことを吐く。引受けたり平吉が。

で、この平さんが、古本屋の店へ居直つて、そして買戻して  
くれた錦絵にしきえである。

が、その後のち、折を見て、父が在世ざいせの頃も、その話が出たし、織  
次も後のちに東京から音信たよりをして、引取ひきとろう、引取ひきとろうと懸合かけあうけれ  
ども、ちるの、びるので纏まとまらず、追せりつかけて追詰せりつめれば、片かた  
音信よりになつて埒らちが明かぬ。

今日こそ何んでも、という意気いきご込みであつた。

さて、その事を話し出すと、それ、案の定、天井てんじよう睨にらみの上う  
睡わねむりで、ト先そらとほず空惚そらとほけて、漸やつと気が付いた顔がんしよく色よくで、  
「はあ、あの江戸絵えどえかね、十六、七年、やがて一ふたむかし昔むかし、久しい  
もんでさ、あつたつけかな。」

と聞きも敢えず……

「ないはずはないじゃないか、あんなに頼んで置いたんだから。  
 ……」と何故かこの絵が、いわれある、活ける恋人の如く、容易  
 くは我が手に入らない因縁のように、寢覚めにも懸念して、此  
 家へ入るのに肩を聳やかしたほど、平吉がかかる態度に、織次は  
 早や躁立ち焦る。

平吉は他処事のように仰向いて、

「なあ、これえ。」

と戸棚の前で、膳ごしらえする女房を頤で呼んで、

「知るまいな。忘れたろうよ、な、な、お前も、あの、江戸絵さ、  
 蔵の中にあつたっけか。」

「唯、ござりえず、出しますかえ。」と女房は判然言つた。

「難有う、お琴さん。」

とはじめて親しげに名を言つて、凝と振向くと、浪の浅葱の暖簾越に、また颯と顔を赧らめた処は、どうやら、あの錦絵の中の、その、どの一人かに倂が幽に似通う。……

「お一つ。」

とそこへ膳を直して銚子を取つた。変れば変るもので、まだ、七八ツ九ツばかり、母が存生の頃の雛祭には、緋の毛氈を掛けた桃桜の壇の前に、小さな蒔絵の膳に並んで、この猪口ほどな塗椀で、一緒に蜷の汁を替えた時は、この娘が、練物のような顔のほかは、着くるんだ花の友染で、その時分

から円まるい背を、些ちと背屈せこみに座くる癖せで、今もその通りなのが、こ  
うまで変まつた。

平吉は既もう五十の上、女房はまだ二十はたちの上を、二ツか、多くて  
三ツであろう。この姉あねだった平吉の前ぜんの家内が死んだあとを、十  
四、五の、まだ鳥も宿やどらぬ花が、夜半よわの嵐あらしに散ちらされた。はじめ  
孫まごとも見えたのが、やがて娘むすめらしく、妹いもうとらしく、こうした処ところでは  
肖ふさわしくなつて、女房にようぼうぶりも哀あわれに見える。

これも飛脚ひやくに攫さらわれて、平吉の手に捕とらわれた、一枚の絵である。  
う。

いや、何んにつけても、早く、とまた屹きつと居直ると、女房の返  
事に、苦い顔して、横よこ睨にらみをした平吉が、

「だが、何だぜ、これえ、何それ、何、あの貸したきりになつて  
るはずだぜ。催促はするがね……それ、な、これえ。まだ、あの  
まま返つて来ないよ、そうだよ。ああ、そうだよ。」

と幾度いくたびも一人で合点のみこみ、

「ええ、織さん、いや、どうも、あの江戸絵ですがな、近所きんじよがつ

合壁へき、親類中の評判で、平吉が許とこへ行つたら、大黒柱より江戸  
絵を見い、という騒さわぎで、来るほどに、集たかるほどに、丁とんと片時かたとき  
も落着おちいていた験ためしはがあせん。」

と蔵の中に、何とやらと言つた、その口の下……

「手前てまえじゃ、まあ、持物もちものと言つたようなものの、言わばね、織

さん、何んですわえ。それ、貴下あなたから預かっているも同然な品な

んだから、出入れには、自然、指垢ゆびあか、手擦てすれ、つい汚れがちにもなりやしようで、見せぬと言えは喧嘩けんかになる……弱るの何んの。そこで先ず、貸したように、預けたように、余所よその蔵くらに秘しまつてありますわ。ところが、それ。」

と、これも気色けしきばんだ女房の顔を、兀はげあが上あがつた額ひたいごし越こに、ト睨やつて、

「その蔵くら持もちの家うちには、手前が何でさ、……些ちとその銭レコしき式しきの不義理があつて、当分顔の出せない、といったような訳わけで、いずれ取つて来ます。取つて来るには取つて来ますが、ついちよつと、ソレ銭レコしき式しきの事ですからな。

それに、織さん、近頃じゃ価ねが出ましたつき。錦にしきえ絵えは……唯たつ



た一枚が、雑とあの当時の二百枚だつてね、大事のものです。貴あ下なたにも大事のもので、またこつちも大事のものでさ。価ねは惜おしまぬ、ね、価ねは惜ねまぬから手放さないか、と何なんたび度も言われますがね、売るものですか。そりや売らない。憚はばかりながら平吉売らないね。預りものだ、手放して可いいものですかい。

けれども、おいそれとは今言つたような工合ですから、いずれ、その何んでさ。ま、ま、めし飲あがれ、熱とい処ところを。ね、御ご緩ゆり。さあ、これえ、お焼やき物ものがない。ええ、間抜あけな、ぬたばかり。これえ、御酒ごしゆに尾頭おかしらは附物つきものだわ。ぬたばかり、いやぬたぬたとぬたつた婦おんなだ。へへへへへ、鰯いわしを焼いきな、気は心よ、な、鰯いわしをよ。」

と何か言いたそうに、膝で、もじもじして、平吉ひたいの額ひたいをぬすみ

見る女房の様は、湯船へ横飛びにぎぶんと入る、あの見世物の婦らしい。これも平吉に買われたために、姿まで変ったのであろう。坐り直つて、

「あなたえ。」

と怨めしそうな、情ない顔をする。

ぎよろりと目を剥き、険な面で、

「これえ。」と言つた。

が、鰯の催促をしたよう。

「今、焼いとるんや。」

と隣室の茶の室で、女房の、その、上の姉が皺びた声。

「なんまいだ。」

と婆ばばが唱となえる。……これが——「姫松殿ひめまつどのがえ。」と耳を貫く。  
 ……称しょうみよう名なの中から、じりじりと脂肪あぶらの煮える響ひびきがして、腥なまぐさい  
 のが、むらむらと来た。

この臭気しゆうきが、偶ふと、あの黒表紙くろひょうしに肖そっくり然ぜんだと思つた。

とそれならぬ、姉様あねさんが、山賊さんぞくの手に松葉燻まつばいぶしの、乱みだるる、揺ゆめ  
 く、黒髪くろかみまでが目前めまへにちらつく。

織次おしじは激はげしくいった。

「平吉、金子かねでつく話はつけよう。鰯いわしは待まちて。」



## 青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

1999（平成11）年3月15日第19刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十二卷」岩波書店

1942（昭和17）年4月初版発行

初出：「太陽」

1910（明治10）年1月号

※底本の親本は総ルビ。底本作成時にルビが取捨選択されています。

入力：今中一時

校正：青木直子

1999年12月16日公開

2005年12月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 国貞えがく

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>